
嘘つきと超能力

坂本とも

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

嘘つきと超能力

【Nコード】

N7325Q

【作者名】

坂本とも

【あらすじ】

今からちょうど30年前、そう……おとぎ話になり下がるには最近すぎるそんな時分、人類は超能力者を生み出した。

第一話（前書き）

のちのち残酷描写をいれる予定なので苦手な方がいれば注意してください。

第一話

特集！！街にはびこる都市伝説、そんなものが目に入ったので思わず目を止めてしまふ。

恐怖！！人を襲う地球外生命体

日本政府が秘密裏につくる巨大地下空間

目撃者多数！？謎の小さいおじさん

超能力者はまだ生きている？

拾ってはいけない電波が拾えるトンネルがある

などなど、三流ネタから俺のような世間に疎いヤツまで知っているようなものまで。

それにしても超能力者が……その単語を見たのは何年振りだろう？少なくともここ最近は聞いていないな。

今からちやうど30年前、そう……昔話になり下がるには最近すぎるそんな時分、人類は超能力者を生み出した。

否、その言葉には誤りがある。正確には研究などにより生み出されたのではなく、自然的に生まれ始めたのだ。

生まれたばかりの赤子が宙に浮かんだ、火を噴きだした、喋ったといった荒唐無稽な話が出始め、世間は一時期混乱の極みに達しよう

とした。そんな中、政府は超能力者の存在を世に発表した。

その内容を簡略化すると、

世界中でここ5年、局地的ではあるが今回の事件に類似したような事例が報告されており、あまりの非現実さと余計な混乱を招かないようにという配慮のため国民には情報を流さなかった。

だが、今回世界規模で起こったことにより政府は超能力者の存在を公のものとして公式に認める。なお、超能力者という名称はマス・メディアによって広まったものであり今後、正式な場では超能力者のことを超心理学に則りPSSIと^{サイ}呼称する。といった具合だ。

それによる世間の反応は様々であったがとりあえずは騒ぎはおさまった。発表後のPSSIの処遇についてだが、PSSI専門の学校に強制で通わされるという風にしか民間人には知られていない。ただ、とある大きな事件によってその多くが命を落とし、もう現生するPSSIは一人もいないとされている。

雑誌に目を落とし、ぼーっしていると急に雑誌に影がかかった。

「何か用か？」

顔をあげてニヤけているそのアホ面の持ち主^{おのてらまさよし}小野寺将義を見上げる。

「いやあ、久坂君^{くさか}もファッション雑誌なんか見ちゃってお年頃なんだなあゝなんて思っちゃって」

「ファッション雑誌に見えるか？これが」

目の前でひらひらと芸能ニュースとでかどかどか書いてある表紙を振って見せる。

「いやいや、最近の情報誌はそっち方面もカバーしてますぞ旦那」
「へえ、そうなんだ、漫画雑誌しか読まない割にいろいろ知ってるんだな」

「ふつ、一を聞いて十を知る男だからな」

こんなしけた客しかないのに、わざわざボケるたびにおどけた動作をとるこの男は大した役者だと思う。

「意味を履き違えてると思うけど……まあいいか、んで今日はわざわざ特進クラスから来て何の用なんだよ」

「暇だったから覗きに來ただけなんだけど、お前がやけに真剣に雑誌を見てるからまた愛莉^{あいり}さんに無理難題でもさせられてるのかなあ」と思ってたわけですよ」

「将義……それ正解。なしてわかったの？」

「お前さんが雑誌見て首捻ってるなんてそんぐらいしか理由が逆に思いつかないからな」

ふふん、とあごに手をあてふんぞり返っている。

ちようどいい、こいつも巻き込んでやろう。

「手伝ってくれ、面白い話題をピックアップするんだってよ。俺と姉貴じゃ感性が根本から違うから、何選んだらいいかわからん。」

そう、今朝いきなりこの雑誌を渡されて

「今日中に面白い話題ピックアップしといて」

とのことだ。受け取って改めてその傍若無人さに驚いているとそいつはわざわざ振り返って

「ああ、言い忘れるところだった……面白くなかったら殺すから」
最後はつぶやきのようだったがはつきり耳まで届いた。

「というお話なんですよ」

「なんだそりやどこの怪談だよ。俺パース」

今にも逃げ出そうとしているこの男の肩をがしつ、と言わんばかり

に全力でつかみ、そして満面の笑みで告げる。

「逃がすか」

「そだ、由利^{ゆり}が久々に久坂さんに会いたいか言ってたぞ」

「へえ、じゃあ今度お邪魔してもいいか？」

「ああかまわねえよ」

「ひさしぶりだな、由利ちゃんと光^{ひかる}くん元気にしてる？」

ちなみに由利ちゃんと光くんというのは将義の妹と弟のことである。

「ああ、あいつらはいつも人並み以上に元気だよ」と

「どした？」

「わりいもう行かねえと」

「そうか引き止めて悪かったな。じゃあな」

「おう」

と手を上げてこちらに答えると内緒話でもするように耳に手を当ててきた。

「なんだよ」

「ここだけのホットな情報を教えてやるよ。まあ愛莉さんの課題にやあ関係ねえが」

「ならいらねえよ」

「いいから聞いとけて、あのな俺のクラスに相沢沙羅^{あいざわ しろ}って女がいるわけですよ」

「へえ、でまた惚れたのか？」

「いや……まあ顔はいいんだけど性格が難儀なんだよなあ、あれで性格が人並なら間違いなく声かけてるな。あと、またって言うな」

「んで、その相沢さんがどうしたよ。まさかとは思うけど俺に声かけろって話じゃないだろうな」

「それはお兄さんの早計ですよ。いやあね、実はその相沢がスーパー特進に受かったという話なんですよ」

「はあ！？スーパー特進に受かった？なんだその与太話、そんなことあるもんかどうせいつものデマだろ」

スーパー特進というのはうちの学校にある謎のクラス分け制度の一つである。

成績の上から順にスーパー特進（以後ス特と表記）、特進、標準クラスという三つに分類される。

ス特はA B組、特進はC D E組、標準はF G H組といった具合にアルファベットが後になるにつれて成績が低い。

特進と標準間での生徒の移動はある、しかしス特にはないといって過言ではない。つまり入試でス特に入れたものは以来不動の地位をもらえるのだ。

そんなス特に入試以外で入れたものは、開校以来一人もない。一応ス特に入れるというテストはあるそうだが、その内容が正気の沙汰とは思えないほど難しいらしく、なんでも軍略についての記述がだされたとか、麻雀を囲んでいる先生方に紛れ込んで打たされただとかいろいろあるらしい。

そんな無茶苦茶なテストでよく苦情が来ないもんだと逆に感心する。「いやいや、デマかどうかはお兄さんの目で実際に確かめてもらったほうが早い。というわけで明日そのことが中央掲示板に載るらしいから、一緒に昼休みにでも見に行こうぜ！」

「ああ……気が向いたらな」

ではこれにてドロンといってあの馬鹿は走って行ってしまった。

第一話（後書き）

初投稿です。

できれば感想をば、と思います。

へたくそだと思ったり、文法的におかしいんでねえの？と思ったりしたところがあれば教えていただければ幸いです。

第二話

あの馬鹿が去り、授業がすぐ始まった。その後は滞りなく授業が進み、

「これが終わったら今日の授業も終わりみたいなもんだなあ」と次の現国の先生に申し訳ないようなことを考えて、気の抜けまくった態度で授業にのぞんだ。

そんな罰かは知らないが、授業終わり先生に

「久坂、今日の授業で使ったゴール、網は外してあるから後は元あった場所に返しておいてくれ」

と言い渡されてしまった。ちなみに今日の授業はサッカーである。

「いいですけど……なんで俺なんですか？確かいつもはサッカー部の連中がやってたと思うんですけど」

「いやあ俺もあいつらに頼んだんだが、サッカー部はみな用事があるとかで親友の久坂に後はまかせた、と言って走って行ってしまったんだ、放課後で構わないからよろしく頼む」

あいつら、明日覚えとけよと思いつつ先生に一礼し、その場を去った。

そして放課後、いま目の前に噂のゴール×2があるわけだが先生も頭を使うべきだと思う。普通はもう二、三人に声を掛けておくべきだ。

「一人で運べっただけか？」

とりあえず手をかけて引きずってみる。

意外と動くが元の場所まで数十メートルある。これを二度繰り返さなければならぬ。

はあ、と思わずため息が漏れるやるしかないんだろうか。

まわりではすでに部活がすでに始まっているのか、掛け声がひびいている。

…閑散とした風景、
空というより地面から染み出てくる夕陽、
それにつき従うように生ずる陰影、そのどれもが自分をこの世界から孤立させる

そのどれもが自分の本質を浮き

彫りにさせる
少し頭にくる

不快な感触、これは自分を侵すものだ

不可侵であるハズのものを理解しようとしてくる

してくる……が、いや待て

むしろこれら本質はもっとべつに……

はっと目が覚める。

ぼおっとしてたようだ。

校舎の時計を見ておどろく

「うわっ、もう六時かよっ、さっさとすませないと」

結局、必死になって運ぶ羽目になった。

（くそー体育の原西許すまじ）

そんなことを考えて、帰ろうとしてうしろを向くとそこには見慣れない教師の姿があった。

そいつは教師にしては恰幅のいい男で、顎に手をあて、背中を校舎

の柱にあずけてこちらのほうを向いている。

新任の人だろうかと推測しながら会釈をして前を通り過ぎた。
なぜか無事前を通れたことをほっとしながら帰路についた。

第二話（後書き）

か……かんそう……ぷりーず……

第三話

次の日、結局姉貴の課題が間に合わなかったため、こそこそ隠れるようにして、朝早くから家をでた。

通学路をゆつたりと歩いていると、目の前にふらふらと体を揺らしながら歩く不審者の後ろ姿に遭遇した。

「よっ、相変わらず朝弱いな」

と不審者もとい小野寺将義に声をかける。

「よお……はえな。……さあいきん社長はやってねえのかあ？」

「どうでもいいけど声ちっちな。あとろれつもあんまりまわってねえし」

ちなみに将義が言う社長とは、社長出勤つまり遅刻のことである。

そんなこんなで学校に着くまで雑談に興じていたが、学校に着くと将義は早朝練習にでるとかなんとかで、別れることになった。

「ひいるんなったら、むかえにいくぜええ」

と一言残し、ふらふらと去っていく様はなぜか少し憐れだった。

三時間目になって少々普段と違うことに気づく。

「見られてる気がする」

思わずそうつぶやいてしまった。

「誰にだよ」

そう俺のつぶやきに律儀に答えたのは友人の一人である斎藤博之だ。さいとうひろゆき
容姿は中の中あまりぱつとしない、と自分で言っていた。

そしてとなりで不思議そうに首をかしげているのが堀龍之介である。ほりりゅうのすけ
こいつは背が低く、童顔なので中一に交じっても違和感は皆無だ。

本人もそのことを気にしているため口にしないう心がけているが、博之曰くそのおかげで上級生の彼女を持ってるんだから、そのことをイジらないとこちらに勝ち目はないとか。
ちなみに二人とも俺と同じG組である。

「誰っていうか……全体的に？」

そういった瞬間、二人はぐるっとまわりを見てこっちに視線を戻した。

「なるほど」

「たしかに見られてるね」

「だろ」

そう、間違いなく周りから見られている。今は三時間目の休み時間で化学室から教室に帰っている途中でもある。

視線に気づいたのは一時間目の休み時間トイレに行った時である。

一人の生徒がこちらを窺うようにじっと見ていたのだ。敵意はなさそうだったのでそのままにしておいたら、二時間目にはすでに化学室に向かう道すがらだけで五、六人に見られていた。

そして今に至る。

廊下を歩くだけで、もれなくみんなが見てくる。

「見られてるのお前なんじゃないのか？」

「心当たりある？」

とそれぞれ訊いてくる。

博之と龍之介は小学校時代からの友達らしいので、こんなときはコンビンーションがいい。

「心当たりかあ、まったく言っていないほどないなあ」

「そうか……」

「まあほつときや治まるだろ人のうわさもなんたらかんたら…ほら、さっさと教室に戻ろうぜ」

「「ポジティブだなあ」」

そんな俺に対する評価でハモツたらしい二人が笑いあっていた。

さてさて、四時間目の授業が終わってやっと昼ごはんにありつけると弁当を取りだしたところで、お祭り男につかまった。

そいつはあることかうちのクラスに着くなり

「俊哉しゅんやいるかあー!!」

と叫びやがった。

その瞬間、俺は走りだし見事としか言いようがないとび蹴りを決め、将義を廊下までふきとばした。

ガタイのいい男がふっ飛んで行く姿はとても爽快だったという博之の話である。

「ぐうう……やるじゃねえか」

あつ、蹴られた腹をさすりながら戻ってきた。めげない男だほんと。

「んで？人様の名前を叫んでなんのようだ？」

「そうだった！本題を忘れるところだった。お前いま大変なことになるってんだぜ!!」

「大変なことって？」

「あああもうめんどろだ!!　ちよっとつきあえ!!」
そう言うなり走りだす。

「なんなんだほんと!」

そう言つて将義、俺、博之、龍之介の順番で走りだす。

「なんだお前らも来んのか？」

走りながら後ろの二人に声をかける。

「こんな面白そうないベント見逃せるかよ」

「右に同じ」

ということらしい。

廊下を走っている間もあちらこちらから視線を感じる。

そりゃあ、こんな大所帯で走っていたらみんな見てしまうと思うが、みんな一様に俺を見ている。指をさしたり、あげく写メまで撮ってくるヤツまでいる始末だ。

いつから俺は有名人になったんだあーと心の中で叫びながら、将義について行く。

「やっとなつたか？」

将義が立ち止まったので尋ねると頷いた。

そしてその視線の先には

「なんだあれ、掲示板に人が群がってる」

龍之介がそうつぶやいた。

「行くぞ」

さっきまで黙っていた将義が急に歩を進めた。

「行くぞってまさかあん中突っ切んのか小野寺？」

そう博之が尋ねた。

「こいつがいるから大丈夫だ……おい邪魔だどけえ!!」

俺を指さし意味のわからないことをほざいてから、こともあるうちにその集団全員に聞こえるであろう声をだして暴言を吐いた。

この言葉にさすがにむかついたのか将義に殺気が集まるが、その後の俺の姿を見た瞬間、その殺気が霧散してしまう。

その後は、モーゼの十戒のごとく人混みがわれていき、掲示板前にたどりついた。そして掲示板をのぞくとそこにはこんな紙が張り付けられていた。

『特定生徒クラス替えのお知らせ

二年C組1番 相沢沙羅、二年G組12番 久坂俊哉

以上両名は明日5月18日を以ってA組所属とする。』

「……はっ？」

思わず驚愕で頭が真っ白になる。

ナンデオレマデ？

そんな言葉が頭の中でぐるぐるまわる。

結局その場は、教師が来るまでお祭り騒ぎが続いたらしい。

第四話

「……元二年C組1番 相沢沙羅です」

「元二年G組12番 久坂俊哉です……今日からA組になりました。よろしくお願いします」

なぜこうなったんだろう……。

話は放送で生徒指導室に呼ばれたところにまでさかのぼる。

生徒指導室の扉をあけるとそこには、パイプ椅子に座っている女生徒、おそらく相沢沙羅であろう人物ともう一人見覚えのない女教師がいた。

「あなたが久坂俊哉くんですね、そこにかけてください」
女教師が声をかけてくる。

相沢のほうは無表情だが、それがまた綺麗な整った顔と絹のような長い艶やかな黒髪と相まって日本人形のような可憐さを醸し出している。

女教師のほうはぱつと見、凛々しく綺麗な男性に見える。恰好もそれに拍車をかけており、スリッ姿なのだがパンツタイプのものを着ているため男に見えた、が体の一部分を見れば女性というのは一目瞭然だ。クールビューティーまさにこの言葉が当てはまる。

しかしまあなんだ、二人とも一般的にみればかなり見麗しいのにいかんせん空気がよろしくない。

一人は完全に興味がないのか、こちらを一瞥すらしない。
というかふつうはドアの開く音なんかで振り向くだろ。

そしてもう一人にいたっては言葉のはしに敵意が混ざっている。
明らかにこちらに負の感情を向けて立っている。

はて？こんな女見覚えすらないが、どこかであつたか？

とりあえず言われたとおり席に着くと、女教師がしゃべりだした。

「あなたたちに来てもらったのはわかると思うけど、クラス替えについてです。まあクラス替えについてといっても話の要点はそこにはないのだけれどね」

「あなたたちには、P S I についてどの程度の知識がありますか？」

P S I …… 超能力か。

「30年前、急に現れだした超能力者をさす言葉で政府がその存在を認めたこと。

その能力者はP S I 専門の学校へ通わされ、道德観念を一般学生より徹底していたということ。

登校を拒否したP S I たちがたむろしていたスラムを鎮圧する際、両名とも大勢の犠牲者が出たこと。

今現在、現生しているP S I は存在しないということ」

「右に同じく」

やっと口を開いたと思ったとたん、相沢嬢はなかなかにわかりやすい一般常識のまとめ方をしてくれた。同意するのみである。

「……そう、一般常識とされることより少し詳しいぐらいね」
「その説明に嘘が多分に含まれています」

「うそ？」
「思わずたずねる。」

「ええ、PSIは必ずしも専門の学校に入学するわけではありません。稀にはぐれのように一般の学校にまぎれてる可能性もあります。本人の意思の有無は別として。さらに言わせてもらえばPSIが現生していないということ自体が間違いないのです」

「どういうことだ？ PSIは……」
俺が口を挟もうとした瞬間、女は片手でこちらを制して

「ごめんなさい、最後まで聞いてもらえるかしら」

と心にもない謝罪を口にした。
さすがにむかついたが、続きが気になるのも確かである。
おれがあごをしゃくって続きを促すのと、相沢嬢が「続けて」と発するのは同じタイミングだった。

「ゴホン、では続けます。まずPSIがそもそもまだ現生しているというのは、言葉のままです。
なぜなら……いや、それ以前にPSIは未だに生まれ続けているからです」

「PSIたちには3パターンいます。」

自分自身がPSIであると気づいていないパターン。

気づいているが政府に知られないために隠して過ごしているパターン。

政府など組織に属し暮らしているパターン。」

「三つ目はまだいいのです。だけどそれ以外は危険な存在。我々政府にとってはけして見逃してはいけないものなのです」

「まあ政府と言ってもいろいろありますから、本来は一括りにはしないですけどそれはおいおいということ」

「では待ちに待った質問タイムです。なにかありますか？」

「いや……なにかありますかって言われてもなあ、ちょっと信じられないっていうか荒唐無稽すぎるっていうか……」

おれがそう発言すると女はさも不思議そうに首をかしげて

「荒唐無稽……ですか？そんなものもうこの世界にはないものでしょう。PSIなんてものが出始めたこの世界には」

と言い放った。

「そう言われるとこつちとしてはなんにも言えんのだが……相沢嬢はなにかあるか？」

おれの言葉、とくに相沢譲のところでは眉をしかめていたがその返答はシンプルだった。

「三つ訊く」

と簡潔に女に告げる、ただそれだけ。

女がうなずくのを確認してからしゃべりだす。

「一つ、お前自身もPSIか？」

二つ、私にそんなはなしを聞かせてどうするつもりだ？

「三つ、貴様は敵か」

疑問ではなく殺意をもって最後の言葉を紡ぎだす。
その様子に女は一つため息をついて答えはじめた。

「まず一つ目の答えはYESです。能力に関してはまだ話せませんが少なくとも単身でテロを起こせるような類のものではないですよ。

そして二つ目なんですが、あなたたちには政府の監視下つまりA組かB組に入ってもらいます。

スーパ―特進はPSIのために作られたクラスですから。

三つ目ですが……今のところは味方です」

「……………」

「……………」

「それでなんでおれらなんすか」
気まずい沈黙を打ち破って聞いてみる。

「なんで？さつきからおかしなことをいいますね。なぜかは……ここまで聞いたらわかるでしょ？

あなたたちがPSIではないかと疑っているからですよ」

「はあっ？面白い事言っなあんた。でもさ残念ながら違っぜ、おれは超能力なんてウソ臭いもんは使えねーんだわこれが、だから帰らせてもらっ」

そう言って立ち上がり背を向ける。

「そう……残念」

その言葉を聞いた瞬間、振り返り後頭部めがけて飛んできたものを片手でガードする。

手に痺れるような痛みを残すまま犯人に問う。

「なにすんだデメエ」

ぬらりと構えている女教師の姿があった。

体全体の力が抜けているようで凜とした力強さを感じる。この感じ知ってる。

知っているのは剣道だが、似たような武の極致とでも言っべきものを少し感じる。

（やべえな、けどなそっちがやるってんなら）

「やってやるよ、らあっ!!」

大振りなパンチで隙をつくり誘う。

のってこない、紙一重ですべてをかわしている。

しゅんと耳元で風切り音が聞こえる。たまたまかわせた拳打。

安堵する暇もなく右顎を裏拳が掠める。一瞬視界がぶれた。

「うぐっ」

（隙なんかつくれるかよ!）

一歩鋭く踏み込み牽制のジャブを放つ

「しゅっ」

が、俺の左手に絡まるように伸びてきた手が関節で方向をかえ、左の顎を打ち抜く。

「ちいっ」

脳が今の一撃で揺さぶられているが、それどころじゃない。

（くそっなんだいまの蛇みてーな動きしやがった）

後退するしかない。

一撃ごとに腕を削り取るような鈍痛を与えてくる拳をなんとかいなし、タイミングをはかる。

このままでは腕が折れる。なんとか距離をあげなくては

しかし、飛び退く寸前ですさまじいストレートが飛んでくる。腕をクロスさせるが体ごと吹き飛ばされた。

壁に激突する。

「ぐっ」

即座に追撃に身構えるが追撃は来ず、代わりに頭上から声が降ってくる。

「もうあきらめなさい。わかったはずよ、もう勝機はないって」

さんざん揺さぶられて朦朧とする頭で考える。

んなにも熱いなんて

——ドクドクドク、体が熱いこ

勝機？そんなもん考えて闘ってねーんだよ。

ただ死にたくねーからたたかってんだよ

屈服させてーからたたかってんだよ

おれを侵したお前を犯してーか

らたたかってんだよ

——もうしょうきは

ない

しょうき？はは正気なんてとっくにない

だってあれだけ脳みそ揺さぶられたんだなくなっでとうぜんだろ

——吐息だつて

まるで湯気のように

むしろイライナイだろ、おまえをクロスのに

余分ナモノダ

さあとつとはじめようか

——— 相手をとことん侵しあう俺たちの殺しあ
いを

踏み込む、技術なんてあつたもんじゃない。

動きはまさにケモノのそれ、人にかわせるもんじゃない。

（きもちがいい）

さっきまでのワンサイドゲームが転換する。

拳の速度が加速する。拳の重みが増していく。

技を力で食いちぎる。

だんだん女から焦りが伝わってくる。

渾身のストレートで壁際まで吹き飛ばす。まるで先ほどまでの再現。

だが生憎ここまでなぞつてやる義理なんぞない。

あとはその茫然とした顔に拳をたたきこむだけで終わる。

「らあああああ……！！！！」

「そこまでだ」 重ぐるしい声によってそれは結末を迎える。

女が咄嗟に迎撃するために打った拳が片手で受け止められ、おれの

拳も難なく受け止められ止まった。

第四話（後書き）

ない脳を振り絞ってやつとこさ四話目……

ついに ついに感想があきたああー！！！！！！

感想を下さった加溜羅さんありがとうございます。

この感謝を胸に精進していきたいと思っています。

第五話

「落ち着いたか」

「すみません」

「……すみません」

先ほどのたたかいを止めた人物はあの放課後に見た男だった。名前は九鬼というらしい。なんでもB組の担任だとか。

そして名前すら教えてやがらなかった女教師はA組の担任で、名前は鳥羽というらしい。

「では、簡潔に告げるとしよう。

相沢、久坂の両名は明日よりA組所属となり、PSI用の授業を受けてもらうことになる。

そして放課後には研究所にて検査を受けてもらう。

お前らの保護者にはこちらから伝えよう。余計な波風を立てたくないのなら家庭ではこの話題を出さないのが賢明なもののやり方だな。今日はもう帰って明日に備えるがよろう。

久坂は保健室によるといい、こちらで手配しておく——以上だ」

それだけ言うと、その巨体を翻し行ってしまった。

はぁあつ、と思わず体から力がぬける。

周りにもう一人俺とよく似た惨状の奴がいた。

普段の凜とした感じがぬけ、呆っとしているため近寄りやすい雰囲気
気がでている。

相沢はと、見てみると平然としていた。いや？若干不機嫌か？

ああ…… そりゃそうか。

こっちとしてはそんなつもりはなかったけど、相沢を無視した形で
ことを進めたことになるんだ。

あげく隣で喧嘩をおっぱじめたんだから、こっちはなる。
後で謝らないとな。

そう思い顔を戻すと、鳥羽と目があった。

思わず顔をそらす。

そして戻してみるとまた目があった。

「なんなんですかさっきから！！チラチラとこちらを見て、
そういうのを下種の勘ぐりっていうんです！！」

「待て待て待て、誤解だ誤解、あんたがこっちをじっと見てるから
だろうが！！」

それに下種の勘ぐりって…… なんのことかだかさっぱりだ」

えっ？と顔を赤くして固まってしまった鳥羽。

まったくなんのことを言っているんだか。

下種の勘ぐりって俺が誰と誰の仲を勘ぐったっていうんだ……。

……っ っ おいまさか

「あんたまさか……」

「うううすいません、勘違いしました」

「勘弁してくれよ」

「すいません、でも一応伝えておくと九鬼先生は私の体術の師なんです」

「へえそうなのか、それならあの凶悪な威圧感もうなずけるってんだ」

「どういう意味ですか!」

そうこうしているうちに、相沢が鞆を持って立ち上がった。

「帰ります」

相変わらず俺を一瞥もすることなく帰って行った。

はあ、と一度息を吐くとそこには男装の麗人に戻った鳥羽がいた。やっと落ち着いたのだろう。

「あなたは帰らないんですか？」

それともあなたみたいな人は露骨にぶぶ漬けでも出さないと帰りませんか？」

「べつに帰るよ。こっちだって好き好んでいるわけじゃない」

そういつて鞆を持ち上げ、戸に手をかけところで後ろから

「それであなたは何者なんですか？」

っていう長くなりそうな質問が飛んできた。

ああ、そういえば保健室にも寄らないとなあ。

しょうがない、面倒だけどたまにはホントのこと教えてやるか。

「なんてことないただの嘘つきだよ」

第五話（後書き）

今回は短くなってすみません。

第六話

翌日、ほっとけば一晩中鳴り続いたんじゃないかと言っほど、鳴った携帯を部屋に転がしたまま家を出た。

今日からA組になったらしい。

正直なところかなり緊張している。それはそうだ。

だってクラスメイトすべてが超能力者らしいのだから。

まあまだ実際に見たわけじゃないからかなり眉唾な話だけど。

そんなことを考えているうち、あっという間に学校に着いた。

職員室に辿り着き、やっぱり元担任に声掛けするべきかなーと間拔けにキヨロキヨロ元担任を探していたら、後ろからちよんちよんと肩をつつかれた。

「ん？」

振り向くとそこには相沢がいた。

（相変わらず無表情だけど、顔は可愛いよなやっぱ）

「俺に用？」

「……鳥羽先生は西校舎、早く来て」
袖を掴んで引っ張って行こうとする。

「おわつと、わかったから！そんなにグイグイ引っ張らなくても逃げやしないから」

「そう？」

そう言って今度は袖を話すとぐんぐん先へ行ってしまう。

あわてて追いかけようと早足気味で歩くと、あっさり追い越してしまった。

それもそのはず、俺の身長は165センチ男子高校生にしてはかなり小さめなので気にしている。

そして目測で相沢は160センチくらい、5センチ位と思うかもしれないが5センチの差はデカイ。

こっちが追い抜かすと、慌てて追い抜かし返そうとしてくる相沢。

本人には内緒だが、かなり可愛かった。

しばらくすると西校舎の職員室に着く。

この学校には職員室が4つも存在する。

今までいた職員室は東校舎の職員室で、そこからここまで移動してきたわけだ。

そう移動してきたわけなのだが……

「あんたわざわざ部屋の外で待っててくれたのか……？」

「うつつ、べつ別にそういうわけはありません！！」

ただ少し遅かったたので様子を見に行こうとしただけです。

ええそうです、あと先生に向かってあんたは直しなさい」
「がーと火でも噴きそうなほどの剣幕。

もしや、こやつらの武術にはそういう技があるのではないか。
なんかこう威圧感をだす技的なやつが。

「ああ、それは失敬」

はて？あまりの剣幕に思わず謝ってしまったが、そんなに遅かっただろうか？

相沢との競争の末、急ぎ足になっていたと思うのだが。
しかし藪をつついて蛇をだしかねないので、思考を放棄した。

触らぬ神は祟りなんて起こさないのだ。

「……元二年C組1番 相沢沙羅です」

「元二年G組12番 久坂俊哉です……今日からA組になりました。
よろしく願います」

恒例の挨拶が終わったのだが……

なんだこのクラス……まるで生気がない。

まるで人形のように精彩に欠けている。表情がない能面。

いや全員ではない。こちらを見てニタニタ笑っているヤツも数名いる。

……嫌な笑いだ、殺したくなる。

しかしこの感じどこかで……？

……そっかこれ相沢に似てるんだ。顔じゃなく表情が雰囲気だ。

PSI用の授業と聞いてどんなものかと思えば、特に変わったところもなく放課後になった。

ニタニタ笑っていた奴らも授業はまともに受けていたし、休み時間も絡まれることもなかった。

唯一驚いたのが時間割に道德なんて教科があつたのぐらいか。

まああと友達つくれそうにないことくらい。地味に一番つらいことだと思う。

……大丈夫だ。俺には相沢がいる。
今日の放課後は研究室に行くとか言っていたから、相沢を連れ添って担任のところに行ってみますか。

よしつと決意を新たにしたところで、肩を朝同様ちょんちょんつつかれる。

振り返ると相沢がいた。

「早く行こう」

「……そうだね」

不覚にも泣きそうになった。

第七話（前書き）

第六話のサブタイトルのところをなぜか第四話にしてましたすみません。

私が友達にドジっ子と呼ばれるゆえんです……

第七話

研究所と言われるところは、電車で三駅ほど行った場所にあった。中小工場の連なる地帯に隠れるようにひっそりと建てられている。無言で先を歩く我らが担任の鳥羽に相沢とともに歩いて歩く。

門をくぐり、受付らしき人に書類を渡し用件を伝え、認証をカードでパスしどんどん進んでいく。

そして白衣を着た人がちらほら見え始めるようになったところでやっとなと停止。

そこはまるで病院の待合室のような場所だった。

通りがかかる白衣が不躰な視線を送ってくる。

「じゃあ説明させてもらいます」

そう振り向いて鳥羽は話し始める。

「まずは、なにも聞かずついて来てくれたことに礼をさせてもらいます。おかげでスムーズに進みました」

「まあそれはいいとして、ここなんなの？」

研究所とか言ってるけど見た目学校で、中は会社と病院みたいな」

「はい、その発言はある程度、的を得ています。ここはPSIに関する施設を集めた複合施設なのです。」

私たちに用があるのがここなので、他の施設の説明は不要でした」

「ふーんえらく警備が厳重なもの、その施設とやらが関係すんの？」

「ええ、その説明をするには段階を踏んで説明する必要があります。よろしいですか？」

「ああ、御好きに」

「では……まずP S Iは超心理学的に大きく二つに分類されます。

一つはE S P、通常の感覚器による知覚を超えた知覚のことです。
クレアボーイアンス テレパシー プレコグニション
有名どころでは、透視、遠方の感覚、予知などです。

もう一つはP K、知覚能力を物体に作用するものことです。
サイコキネシス テレポート バイロキネシス
こちらにも例に挙げるとするならば、念力、瞬間移動、発火能力など
でしょうか。

通常はこの二つに分けられます。P S Iと言っても、おもにこれらの能力が大半を占めています。

ここまでで質問は？」

知覚を超えた知覚……超感覚的知覚か……。

「なんとなくわかった。ところでエスパーって言葉があるけどあれ
ってE S Pのこと？」

「はい、エスパーはE S Pの正式名称E x t r a S e n s o r y
P e r c e p t i o nの頭文字をとったものです。
ちなみにP KはP s y c h o K i n e s i sです」

「へー、……ああ悪い手間取らせた続きを」

「はいでは、先程言った通り大半は例に挙げた様なものばかりなのですが、時折特異な能力の持ち主が 出てくるのです。

それらを研究そして保存するのがここの施設の役割なわけです」

「ここで久坂君の質問になるわけですが、ここではいろいろ貴重な検体がいます。例えば単身でテロを起こせたり、例えば単身で災害とよべる被害を起こせるほどの能力者です。それゆえここの警備は外というより中に意識が向いた形になっています。もちろん外が隙だらけというわけではないんですけど」

「保存ね……その保存ってやつはどういう意味だ？

まさか能力だけ取り出すことが出来るってんじゃないよな、もちろん」

「そうであればいいんですけど、現状では不可能です。

保存というのはそのままの意味で、稀有な能力を保持している検体はここで厳重に保存されてもらいます」

「ふーんつまりは監禁すると」

「言葉が違います。監禁ではなく能力の保存です」

心なし、身に付ける周りの視線が鋭くなった気がする。

「いやいや別に責めてるってわけじゃない、全のため一を殺す。立派な判断だと思うよ。」

——でもあんた等の態度が気に食わないってだけのハナシ」

「デリケートな問題なのでここでは慎重な言葉遣いをお願いしたいものです」

「あいわかった承ろう。これから検査だつてのに嫌われるのは得策じゃないからな」

手のひらを返したような俺の言葉に視線が外れたのがわかった。

「まあ検査の後モニターで見せてあげます。災害級の検体を。きつと我々のやっていることが理解できると思います」

「はい、深呼吸してリラックスしてください。

慌てなくていいのでゆっくり落ち着いていきましょう」

頭やら胸やらにいろいろ機械を取り付けられたり、血を抜かれたりと忙しく検査は進み、今は瞑想のような時間。なんでも目の前の男はESPで精神の分析とやらを使えるらしい。そして俺の精神をトランス状態へと導くんだとか。

トランス状態とはESP・PKの集中状態のことで、能力があるなら大抵はそれで反応するんだそうな。

もし能力発動してやばいもんだつたらおっさんはどうすんだとか、発動しちゃったらどうしようか、とかいろいろ考えてたらいつの間にか検査は終わっていた。

結果はもう少し後になるが、一番有力な最後のおっさんの時に引つかからなかったからおそらく大丈夫とのこと。

実はおっさん以外の検査はあんまり意味がないらしい↑かなり優し

い表現

まあ実際PSIが始めたのは三十年前あたりらしいのであまり責めるのも酷かと。

これで俺は晴れて無罪放免かと思いきや、自身がPSIと自覚していないPSIだったという候補が外れただけらしい。自身の能力を完全にコントロールしきれるPSIかもしれないし、そうゆう能力を持った稀有な能力者かもしれないとかで当分はA組。

てか多分卒業までA組。

あと相沢も引つかからなかったらしい。良かったね。

「お疲れ様です。検査も終わったので帰りたいですが、約束事が一つ残ってましたね」

「ああまだ検体とやらを見ていない。相沢も見に行くよな？」

こくりとうなずく。

「ではついてきて下さい」

そろそろと向かった先は、モニターがずらりと並んだ部屋。

「おつかれさまです」

鳥羽が声をかけると警備員のおっさんは一礼し、部屋から出て行った。

「もちろんすべてお見せすることはできませんが、単身でテロを起こせるレベルの検体なら私程度でも見せることができます。」

一番近くのモニターを覗き込んでみる。

そこには体中を拘束具でベットに固定されてなお、暴れ回ろうとものがき、唾を撒き散らしながら叫んでいる青年の姿があった。

音声は聞こえてこない。当然だろう。

だって視界の端に映り込んでくるのは、似たような景色ばかり。

こんな大勢の悲鳴を聞いていたら精神が持たない。

動画だけでもキツイというのに。

「……なんだこれ」

「超能力に吞まれた人間の末路です。人間に過ぎた力を与えられた結果、ココロが脳が壊れてしまったんです」

少し離れてモニター全てを一望できる位置に立つ。

青年と似たような人がほとんどだが、中には固定具もされずベットに腰掛けうつむいている人もいる。さらには普通に生活するようにテレビを見ている小学生ほどの女の子もいた。

「あの人たちなんで……？」

「ああ、あの検体たちは能力を使いこなした稀な例です。

……そしてあの検体が見えますか、あの少女です。

——あれが災害級の能力者、つまりは化物です」

「はっ？」

そこには先程見た女の子が。

「いやいやいや……」。

「あの子が災害級？大人ですら脳がやられているのに、それより強力な能力者の女の子が平然としてるなんて」

ありえない……その言葉を飲みこむ。

現にいま存在しているのだから。

「今のところP S Iは謎に包まれています。この先何百年と続くかもしれない研究です。もしかするとあの少女は、能力に吞まれている人を救うその糸口になるやもしれません」

そのあとはしばらく無言が続き、そのまま帰ることになった。

帰り道、P S Iについて教わりながら帰っていた

「P S Iは研究の結果、十年周期で生まれる波があるそうです。

要するに三十年前にP S Iが頻繁に生まれ始め、五年後の二十五年前に落ち着き始め、さらに五年後の二十年前に多くなるといった風に波になっているのです。」

「またP S Iが生まれる最盛期に生まれた子ほど平凡な能力で、出産が少なくなってきた時に生まれた子ほど、強力な能力をもっているのではないかと統計の結果わかり始めました」

同じ轍は踏むまい、と黙っていた俺だったがそろそろ限界が来た。

「あのー、一ついつすか？」

「なんですか？」

少しほつとする。

この態度を見る限り、鳥羽の俺に対する敵意は抜けてきている様だ。言葉の端のとげとげしさも消えている。

「災害級の人ってあの子しか見てないけど、他に何人くらいいるんです？」

「……それを聞いてどうするんですか？」

「いや……どうするっていうか……あの子が稀有な例っていうのはわかったんだけど、他にどの程度の人がああなっているのかなって思っ。それと災害級は彼女一人しかいなかったし……」

「……はあ、まあいいでしょう。教えてあげます。」

災害級は彼女を入れて十一名います。うち意識があるのが二人、彼女ともう一人は二十七歳の男性、名は大西健人というらしいです。あつたことはないですけど、大西は時々意識が混濁するぐらいでまだ壊れていないと。

ちなみにあの子があそこにいるのはただ単に暴走しないからです。彼女は生まれてすぐ災害級の部屋に入れられましたが、一度も能力を暴走させていないので移したんです。

災害級の部屋は維持するだけでも大量にコストがかかるので」

そんなことを話していると駅に着き、解散といふことになった。

第七話（後書き）

相沢さんマジ空気

はいすいません私の実力不足が原因です

viewpoint 小野寺将義 (前書き)

今回は将義視点で御送りします。

view point 小野寺将義

あのアホと連絡がとれないまま三日が過ぎた。

あいつと連絡がつかないのは珍しいことじゃない。

だが、今回はことがことだけに直接話を聞かないと気が済まない。

今日は斎藤と堀をつれだってあいつの家を訪ねた。

正直な話、俺はこいつらをよく知らない。こいつらもそうだろう。顔見知りだけどその程度。こいつらと俺には確かな壁がある。

それなのにこいつらが俺に頼んできたのは、こいつらがただ単に俊哉の家を知らないだけで知っていそうなのが俺だけだったからだ。

インターホンを押して名乗ると出てきたのは愛莉さん——俊哉の姉貴だ。

年は二十歳ぐらいで細身、髪は茶髪のショート。雰囲気若干、俊哉と似ている。

「なに？どつたの？」

……寝ぼけている風だった。

「いやーあの俊哉について訊きに來たんすけど……」。

どうしたんスか？えらくねむそうっすけど？」

ふぁーと目の前で欠伸を漏らす愛莉さん。

「ああ、聞いてってよ。

実はさ、あの馬鹿の携帯が五月蠅いのなんのって、もう」と話し出す。

後ろの二人が気まずそうにしているのがわかる。

「すみません愛莉さん、たぶんそれ俺らっす。

今日来たのもそれと関係してるんすけど」

と言うと、しゃべり続けていた愛莉さんが止まる。

「アイツと連絡とれないんすよ。

それでなにかあったんじゃないかって。

ほら、いろいろあったじゃないすか。A組に編入とか」

「……………」

愛莉さんが黙りこむ。

いや、顎に手をあててなにか考えている風だ。

そういえば後ろの二人を紹介していなかった。

「ああ、愛莉さんこいつら俊哉の友達っす」

そこで二人は身じろぎして各々紹介しだす。

「えつと斎藤です」

「堀です。俊哉くんとはクラスメイトで、普段よく遊んでもらっています」

「あーうん、そうですね。
普段ウチのが迷惑かけちゃってごめんね。今日もわざわざ足を運んでもらって」

「愛莉さん、あいつ今何してんすか？」
再度問う。

「確か補習だつて言ってた。
なんかス特は授業の進行が違うからとか、
それでこれから放課後は割と遅くなるとか……そんなカンジ？」

「そうですね……ありがとうございました。今日のところは帰って
出直してきます」

「あー小野寺もわざわざごめんね。みんなもまた来てね」
「あっはい」
「わかりました」

会釈してその場を後にする。

後ろから「夜中に電話したら近所迷惑だからだめだよー」
なんて声が聞こえてきた。

愛莉さんに昔、俊哉が付けたあだ名を思い返す。

——ザ・マイペース。

「なるほどなー」と一人で納得。

先ほどのやり取りを思い返す。

一度目の質問のとき、解答を愛莉さんは避けた。
逆に二度目では明瞭な答えが返ってきた。

これはどう考えるべきか。

もし本当に思い出すのに時間がかかっていたのだとしたらそれまでだが、どうも裏がある気がしてならない。

俊哉と愛莉さんは共通の隠しことがある。そんな気がする。

それはどんな内容だ？普通に考えると学校が怪しい。

スアの試験なんて誰も通れないような内容をだしている。誰も通れないような問題をだすのは何故か。

答えは簡単だ。誰もスアに入れたくない。だが文句が出る。なのでテストは作った。

それなのに同時期に二人も合格者を出している。矛盾だ。

学校ぐるみの巨大な謎……か。小説の読みすぎかな。

駅前で二人とわかれる。

二人が去ってからどこに行こうか思案する。

いまからゲーセンってのもあれだけど、ナンパってのもな。
さいわいナンパしてもカラオケが近くにある。

そこでなら時間をつぶせる。

……つってもそんな気分じゃない。しゃーない、コンビニで立ち読

みでもして帰るべ。

そついや最近アイス食ってねーな。

「——ちよつとそこの御仁すみません」

やっぱ人間甘いもん食わねーとやってられねーわ。
じゃあどこがいいか。

「ちよつ!! ちよつとそこの御仁ストップ!!」

スーパーで安価な甘味を買うもよし、少し高級な店で買うもよし。
ああ、喫茶店って手も有った。

「聞こえてます!?!ちよつとストップ、ストオッップ!!」

悪くない紅茶にケーキ、時間もつぶせる。

「よしっ、まずはこれから行きつけにしてもいいほどの店を見つけるぜ!」

「ああもう……止まねって……
……」

viewpoint 小野寺将義 (後書き)

俊哉のお姉ちゃんと謎の人物到来!!

第八話

今日もまた研究所のモニター室に来ていた。

どうしてか、と問われると答えることができない。
興味本位？いや、ちがう。

昨日見た光景に違和感を感じたからかもしれない。
ただその違和感が、何処からくるものなのかわからない。

モニターを覗いても昨日と同じ光景が広がるだけ。

自然、昨日も見えた災害級の女の子に目がいく。

すると……

——目が合った

ぞっとして飛び退く。

画面を再度覗いても、女の子はこちらに背を向けている。

ほっとした。

今、俺が幻視した女の子はこの画面の子とは別物だ。

金の髪に全てを呑み込む漆黒の瞳、そして口元はつり上がり獰猛な
笑みを浮かべていた。

なんだったんだ？……いまの……。

吸い込まれそうな綺麗な目に反して、とてつもない嫌悪感を覚えた。

今日はもう帰ったほうがいいような気がする。

「帰ろう」

本当はここに来られるよう、鳥羽には色々手をまわしてもらっており、こんなにあっさり帰ってしまっているのか？という葛藤もあったが、それすら薄れるほど強烈だった。

研究所を出、駅へ向かい歩いていると妙に温度差のあるカップルに出くわした。

「もし、もし、次はどこに行きますか？」

「まだたかる気がこの女……」。

あの後、喫茶店やらなんやらで散々飲み食いしたくせに」

「なにをおっしゃるウサギさん」

「俺は別にウサギでもカメでもねえよ！」

「……でも……こういうのってデートみたいだな」

「……そうですね。ポッ」

「ははっ顔が赤くなってるぞ」

「いやあん、バカあ」

「……………って、なに一人芝居して悦に浸ってやがるクソアマ!!」
「スパンっ!」といい音をたてて、能天気そうな女をハリセンで叩いた。
というかどっからハリセンなんて出したんだよ。

「こういうのは雰囲気が大事なんですよ!ほらほら腕とか組んじや
いますよ。否が応にでもテンション上がっちゃうでしょ?」

「上がんねえーわ。そんな平坦な胸ごりごり押しつけられても上が
んねーわ。せめて揉ませろ」

「なんと!私の胸を狙ってますよこの人!!
平坦とかなんとか言っちゃって、私のパーフェクトボディを揉み揉
みしちゃう気ですよ!」

「じゃーホテル探すか」

「いやー冗談ですよ。じょ・う・だ・ん」

「えーと、ああそこの道ちよつと行ったとこにあったわ」

「聞いてます!?!」

——なにやってんだあいつ……?

隣に奇妙な格好をした女連れてコントを繰り広げている。

奇妙な格好というのは、上着が夏のこの暑さにも関わらず、口元まで覆うような黒のジャージ。

下は普通の黒いミニスカートだが、上着と相まって喪服のようなイメージを喚起させる。手の裾が余り過ぎていて、昔映画で見たカンフーの達人のように見えた。

十分おかしい格好と言っていい要素が詰まっていると思う。

後ろ髪は真っ赤なりボンで一纏めにされており、顔立ちは綺麗と言うより可愛いと言ったほうがいい。

……いや正確には悔しいことに、とても可愛いが正解。

体系は細身で、身長は相沢と同じ160センチぐらい。

と、そこまで観察を終えたところでもともと気分が悪かったので、そのまま帰った。

しかし今日は変なものをよく見る日だ。

白昼夢なんじゃないのかこれ。

立ったまま寝るなんて特技、練習した覚えもないんだけどな。

まあ今度、将義を問い詰めてやればいいだけか。

第八話（後書き）

すいません最近投稿のペース遅いですよね。
もっとかんばってみようと思います。

第九話

「うそだろっ！聞いてねえぞ！！」

それはいつ叫んだ言葉だっただろうか。

男は森を駆けている。

ばしゃっばしゃっ

先程から突然降りだした雨によって地面にはいくつもの水溜りが出ており、走るたびに服や顔に泥が飛び散っている。

ゴロゴロと、空は雷鳴を吐きだす準備をするかのように蠢動している。

しかし、そんなことは全く気にせず男はひたすら走る。

すでに息も絶え絶えになり、泥にまみれている。

それでもなお、大のおとなが顔をくしゃくしゃに歪めてすら前へ前へと走る理由があった。

だがいずれ終焉の時は来る。

足をもつれさせ、慣性を殺せず巨木にぶつかる。

「チクシヨウ……いてえ」

荒い息を整えるために巨木に背をあずけ座り込む。

はあっはあっぜえっぜえっ

ざああああああああああ

しばらく耳を澄ませても自分の息づかいと雨の音しか聞こえない。

……………俺は助かったのだろうか？

思わず安堵のため息を吐こうとしたその時、
ばしゃばしゃばしゃと人の足音が前方から近づいてきた。

「——あらあらあら。」

意外とお速いんですね。 驚いちゃいました」
能天気な声が掛けられる。

「クソがッ！！もう来やがったのか！！」

腰元に仕込んであるナイフを手に持ち、立ち上がるうとするが足が
もつれてうまくいかない。

ずるずると木を背に、何とか立ち上がることに成功した。

ゆらあと前方の暗闇から現れたのは年若い綺麗な女。

普段の男ならば歓喜しそうなほど絶好のシュチュエーション。

にもかかわらず、男は震えていた心の底から。

女は突然の雨にもかかわらず、あらかじめ予知していたかのように
大きく真っ赤な傘をさしている。

それに留まらず女は奇妙な出で立ちをしていた。

これほどまでに蒸し暑い夏の日なのに、口元まで覆い隠す黒いジャージの上着を着ている。

袖も異常に長い。

顔は……と見ようとしたところで現実逃避をしている自分に気付いた。

「どうかなさいました？」

女は一步二歩とゆったり歩み寄ってくる。

「うごくなッ!!」

叫ぶと同時にナイフを中腰にかまえ、倒れこむように女に向けて走り出す。

人間は突然の大声に反応する反射がある。

男は、ほんの一瞬稼げればよかった。

それだけあれば、能力をつかいトップスピードにまで身体をのせられる。

あとはそのまま女を貫くだけ。

……………そのハズだったのに。

すでに女はそこにはおらず、男は勢い余って倒れこむ……

否、勢い余ったのではなく男の両足、精確には膝から下が消失していた。

雷光がその惨状を映し出す。

「うがああああッッ！……！！！」

「はぁッ！はぁッ！はぁッ！はぁッ！はぁッ！」

苦悶に満ちた声は、雷鳴にかき消される。

女の右袖からいつの間にか、少し小ぶりの刀が飛び出していた。

女の足元には二つの肉片が転がっている。

「まあまあ、シヨック死しなだけ立派ですよ」。

…… 本当に頑丈ですこと。」

あの一瞬、女はくると男を体全体でいなして背後に立ち、袖から飛び出した白刃で、遠心力さえ利用して男の両足を刈り取ったのだ。

そのあまりにも無駄のない動き。

事実、あれほどの速度でことを為したというのに、その身に返り血すら、雨水一滴すらつけていない。

すべてその巨大な真紅の傘が防いでいる。

ここに至ってこの女の異常さがうかがえる。

人を死の淵に追いやってなお、

—— その目は楽しそうに笑っていた。

「安心してください。私は殺しまではしませんから。だからがんば

って生き残ってくださいね？」
そう言って背を向ける

「チクシヨウ！！いつかぶつ殺してやる！！わかったか！！ここで殺さなかったことを後悔させてやる！！！！！！」
男の怨を聞きながら女はひょうひょうと歩いていく。

「ああ、一つ言い忘れてました」

うつかりうつかりと小さく呟いてから

「——そこカミナリが落ちますよ」
と男に簡潔な死刑判決を下す。

呆然とした男を残して、女は歩きだす。

遊ぶように傘をくるくる回して、男の血を雨で洗い流している。

「までッ！！待ってくれッ！！俺脚が今ねえんだ！！！！」
悲痛な男の叫び。

女はくるりと振り返る。

——助かった
男はそう思った。

振り返った女の目が優しく微笑みかけてきていたから。

だが女は一言「——がんばってくださいね？」
そう言い残し姿を消した。

「うそだろ……おい。まだ死にたくねえよ……。チクシヨウ……。つくしよ……。くしょう……。ちくしょう……。ちくしょう！ちくしょう！ちくしょう！！ちくしょう！！ちくしょう！！」

ちくしょおおっおおおっおッ……！」

その数秒後、巨木に向けて雷が落ち、全てを巻き込む轟音と雷光が辺りを呑み込んだ。

その日、5月18日にその場は土砂崩れに巻き込まれた。

男は最後まで気付けなかったのだ、女の顔に張り付いた表情。その微笑みに隠れる狂気の……いや狂喜の色に。

あの女は間違ひなく人殺しを楽しんでいた。

次に会うとき、俺たちは殺しあうだろう。

獲物がわかったのは僥倖。だがそれ以上にどうしようもないほどの
実力差。

俺では真正面から狩ろうとしても、返り討ちにあうのがオチ。

あの女に俺が迫れるとすれば……唯一そう……ゆいいつ……

はっと目が覚めた。

ドクンドクンドクンドクン

動悸が激しい。顔から汗が垂れる。

……なんなんだいったい？

つい今しがたまで、とんでもない夢を見ていた気がする。
気がするというのは実のところ、あんまり覚えちゃいないからだ。

……なぜか将義に会わないといけない気がする。

今日の昼休みにでも会いに行くか、あの珍妙な格好をした女のこと
も聞きたいし。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7325q/>

嘘つきと超能力

2011年10月8日18時26分発行